

地方自治体と高知県立大学との包括連携事業に参加した 教職員の感じる成果と課題

石川麻衣¹⁾⁶⁾、池田光徳²⁾⁶⁾、池添志乃²⁾、荒牧礼子³⁾⁶⁾、首藤ひとみ⁴⁾、塚原和香奈⁵⁾

(2014年9月30日受付, 2014年12月18日受理)

Outcomes and challenges felt by the faculty members who participated in a comprehensive cooperation project with the local government and the University of Kochi

Mai ISHIKAWA¹⁾⁶⁾, Mitsunori IKEDA²⁾⁶⁾, Shino IKEZOE²⁾, Reiko ARAMAKI³⁾⁶⁾

Hitomi SYUTOU⁴⁾, Wakana TSUKAHARA⁵⁾

(Received : September 30, 2014, Accepted : December 18, 2014)

要 旨

本学では、平成23年度に土佐市との包括連携協定を締結したことをきっかけに、土佐市と大学の連携事業を展開している。この連携事業に参加した教職員の感じる成果と課題を報告する。土佐市連携事業とさつき健診プロジェクトに参加した教職員8名を対象としたワークショップを開催し、プロジェクトの成果と課題を話し合う中で、成果と課題を整理した。その結果、連携事業がもたらした成果は、連携相手にもたらされた効果、大学にもたらされた効果、そして、高知県内に波及した効果があった。また、連携事業の基盤である、組織的な支援体制の整備、目的の共有、大学のもつ研究教育機能の発揮を発展させることが課題として挙げられた。

キーワード：大学の地域貢献、官学連携、小児生活習慣病健診

Abstract

The University of Kochi entered into a comprehensive collaboration arrangement with Tosa city, a local municipality in Kochi prefecture, in 2011. We started several projects to foster the collaboration arrangement. One of the ongoing projects is "Tosakko Kenshin Project" that aims to conduct both medical examination and health questionnaire of elementary and junior high school students living in Tosa city. The members of our university ran a workshop to clarify the achievements and problems of the project at the beginning of this fiscal year. The project effects were revealed to involve not only effects to relevant municipal and our university but also ripple effects to Kochi prefecture. The challenges are as follows: systemic support system by the university, sharing a common goal among the members, achieving the education and research functions of the university.

Key words : Regional contribution of the University, Collaboration between administrative and academic organization, Childhood lifestyle-related diseases health checkup

-
- 1) 高知県立大学看護学部 看護学科 講師 Department of Nursing, Faculty of Nursing, the University of Kochi, Lecturer
2) 高知県立大学看護学部 看護学科 教授 Department of Nursing, Faculty of Nursing, the University of Kochi, Professor
3) 高知県立大学健康栄養部 健康栄養学科 准教授 Department of Nutrition, Faculty of Nutrition, the University of Kochi, Associate Professor
4) 元高知県立大学看護学部 看護学科 助教 Department of Nursing, Faculty of Nursing, the University of Kochi, Former Assistant Professor
5) 高知県立大学看護学部 看護学科 助教 Department of Nursing, Faculty of Nursing, the University of Kochi, Assistant Professor
6) 高知県立大学健康長寿センター Wellness and Longevity Center, the University of Kochi

I. はじめに

高知女子大学と土佐市の「連携事業に関する協定書」が締結されたのは、平成20年の10月であった。その後、平成23年7月、高知県立大学長と土佐市長との間で改めて協定書が交わされた際、土佐市のニーズと本学のシーズのマッチングを行い、2つの連携事業が開始された。高知県立大学では、土佐市との連携事業を大学全体で取り組むべき全学部参画型の事業と位置づけ、様々な専門性を持つ教員が学部を超えて協力し合いながら事業を推進する体制を整えた。

この時開始された推進事業のひとつである「とさっ子健診プロジェクト」は、土佐市の健康福祉課職員が、健診受診勧奨等の大人への生活習慣病対策を続ける中で困難性を感じ、子どものうちから予防的に働きかける必要があることを実感したことが契機となった。これを受け、本学からは、地域看護、学校保健、小児看護、公衆栄養、医学を専門とする教員と、事務担当者がプロジェクトに参加することとなった。

プロジェクト開始後、学内教職員間および土佐市職員と大学間でミーティングを繰り返し、相談し合いながら事業を進めてきた。この間、参加した教職員は、それぞれが試行錯誤を重ねながらプロジェクト内で自分の役割を果たしてきた。3年が経過した現在、参加した教職員それぞれが感じているプロジェクトの成果と課題を整理することで、本プロジェクトの発展と、官学連携で行う事業の推進に貢献できると考えた。

本報告の目的は、とさっ子連携プロジェクトに参加した教職員（以下、メンバーと称する）の感じたプロジェクトの成果と課題を分析し、大学教職員の行う地域との連携事業の効果的な推進方法を検討することである。

II. とさっ子健診プロジェクトの概要

1. プロジェクトの目的

プロジェクト開始時の土佐市の課題として、大

人になってからも健康管理をしていけるよう、子どもの生活習慣病の予防及び学童期からの健康意識の向上を図ることがあった。そこで、子どもの時期から健診を受ける機会を作ることにより、自らの健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけることで、大人になっても健康状態を維持できるよう支援することを目的に、平成24年度より、とさっ子健診を実施することとなった。

このことから、本プロジェクトの目的を、「土佐市の小中学生に対する健診の実施とその後の指導を通じて、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促す」と設定した。

2. プロジェクトの概要

とさっ子健診プロジェクトは、とさっ子健診の事業計画・実施・評価に向け、土佐市と大学の打ち合わせを中心に進めてきた。この打ち合わせで大学と土佐市それぞれの進め方を確認した。そして、大学内のメンバーミーティングを行い、教員間で役割分担を行った。最初はなるべく集まって打ち合わせをもつようにし、徐々にメンバー個々ができることを考えて実施するようになった。教員だけでなく事務職員も学内ミーティング及び土佐市との打ち合わせにできるだけ参加するようにし、機能役割を発揮した。

年度毎のプロジェクト内容を表1に示す。当初は、これまで全国で行われてきた小児生活習慣病健診とは異なり、大人の特定健診と同様の検査項目で実施したいという土佐市の意向を踏まえ、検査項目の決定や問診票の内容及び様式の検討など、健診の事業化に向けた準備を共に行った。

その中で、準備だけでなく健診日にも連携できないかを考え、参加者が少しでも健診の経験を有意義なものと感じられるよう、高知県立大学の企画としてお楽しみコーナーを設置することとなった。また、児童および保護者に対する効果的な支援方法を検討するため、大学プロジェクトメンバーによる健康意識調査を実施することとなった。

表 1：年度毎のとさっ子健診プロジェクト実施内容

平成 23 年度	<ul style="list-style-type: none">○土佐市との打ち合わせ：年度内に 2 回行い、次年度以降の進め方について協議を重ねた。○学内メンバーミーティングの実施：次年度の健診開始に向けた準備として、学内プロジェクトメンバーで定期的にミーティングを行い、小中学生の健康調査に関する情報交換及び学習の機会をもった。○情報収集：プロジェクトメンバーで役割分担し、食育をテーマとした学会や研修会等に参加し、情報を収集した。また、食育、小児の生活習慣に関連した文献を収集した。
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none">○土佐市との打ち合わせ：月 1 回程度行い、健診実施方法の検討を行った。○学内メンバーミーティングの実施：プロジェクトメンバーで定期的にミーティングを行い、健診の実施計画および健診実施時の大学からの支援方法を検討した。○とさっ子健診の実施：小学 5、6 年生を対象として、とさっ子健診を開始した。○とさっ子健診におけるお楽しみコーナーの設置：大学の企画としてお楽しみコーナーを設置した。○とさっ子健診における健康意識調査の実施：次年度以降の事業実施の参考にするため、健康意識調査を行い、結果を分析し、土佐市に報告した。○健診結果の分析：健診データ及び問診票の分析を開始した。○学生の卒業研究実施：プロジェクトのテーマと関連したテーマを持つ看護学部 4 回生の卒業研究への協力をいただいた。
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none">○土佐市との打ち合わせ：年 4 回実施し、それぞれの進行状況を共有し、健診実施方法や評価方法の検討を行った。○学内メンバーミーティングの実施：これまでのプロジェクト活動に関する成果と課題及び今後のプロジェクトの方向性について話し合った。○とさっ子健診におけるお楽しみコーナーの設置：大学の企画としてお楽しみコーナーを設置した。○とさっ子健診における健康意識調査の実施：次年度以降の事業実施の参考にするため、健康意識調査を行い、結果を分析し、土佐市に報告した。○結果説明会の学生参加：結果説明会で学生によるミニレクチャーを実施した。○教員による学会での研究成果の発表：3 学会において、本プロジェクトの成果を発表した。○学生の卒業研究実施と研究成果の学会での発表：健康栄養学部 4 回生の卒業研究への協力をいただいた。○大学内連携事業報告会の開催：大学で実施した包括連携事業報告会にて、プロジェクトの成果を報告した。

この調査の結果を、次年度以降の事業実施の参考にするため、土佐市に報告した。合わせて、健診データ及び問診票の分析を開始した。これら分析結果は、平成25年度の学会で報告¹⁾²⁾³⁾した。

プロジェクトに学生の力を活用したいとの思いから、健診当日のお楽しみコーナーの運営や結果説明会におけるミニレクチャーを看護学部学生および健康栄養学部学生に実施してもらった。さらに、参加のテーマと関連したテーマを持つ学生の卒業研究への協力をいただくこととなった。

このように、プロジェクトの内容は、とさっ子健診の企画・実施・評価にとどまらず、教員の研究活動や学生の教育活動も含まれるようになった。

3. とさっ子健診の概要

対象は、保健指導の内容が理解でき、生活習慣を自ら実践できる年齢だと判断できる、小学校高学年及び中学生である。平成24および25年度は小学生対象の健診のみ開始し、平成26年度からは中

学生対象の健診も開始した。検査項目は、成人に実施している生活習慣病予防対策のための特定健診の項目に貧血検査を付加し、市内の保健福祉センターにて集団健診として実施している。平成24年度は小学 5 年生および 6 年生523名を対象に、12月に 1 回実施し、71名の参加があった。平成25年度は土佐市内全域の小学校5年生245名を対象に、7月と12月の2回実施し、計114名の参加があった。この健診の様子や結果について、新聞報道がなされた。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

土佐市連携事業とさっ子健診プロジェクトに参加した教職員 8 名

2. 方法

土佐市連携事業とさっ子健診プロジェクトに参加した教職員を対象としたワークショップを開催し、とさっ子健診プロジェクトの成果と課題を話し合った。参加者それぞれが感じる成果と課題をカードに記入し、それを互いに発表し合った。話し合う中で出てきた新たな意見もカードに記入し、似たカードをまとめてグループ化し、グループの表題をつけながら、成果と課題を整理した。

IV. 倫理的配慮

研究対象の教職員および教職員の所属組織に、公表の承諾を得た。また、土佐市の関連部署より、本報告の公表について了解を得た。

V. 結果

ワークショップを2回開催した。参加者の内訳は、教員6名、事務職員2名であった。結果を表2に示す。文中の『』は、ワークショップで挙げた意見を示している。

1. 連携事業の推進に関する効果と課題

とさっ子健診プロジェクトの成果は、連携事業が進んでいるということに集約された。平成24年度の事業を企画する段階で、大学が情報提供を行った先進地の取り組みが大いに参考になったことや、互いに相談し合いながら準備を進めたことで、メンバーは連携が進んでいるとの実感を得ていた。連携事業の促進の効果は、地域の関係機関と大学の連携が強化されたこととして捉えられていた。他大学の地域連携事業の状況を情報交換した経験のあるメンバーは、大学の地域連携として実際に動いているプロジェクトのよい例になると考えていた。

メンバーは、大学組織とプロジェクトメンバーの温度差があることを課題に感じながらも、メンバーのチームワークができ、学部間の連携のもとメンバーが役割分担してプロジェクトを進められ

たことで、連携事業が進んだと感じていた。これには、時間確保や日程調整の大変さを課題として感じていながらも、忙しい中メンバー間や土佐市職員との間で、皆が集まり直接顔を合わせて話し合うことを大事にしてきた成果が表れていた。

大学行事や他の仕事との調整の難しさは、複数のメンバーが感じていた。その際、他の仕事を優先せざるを得ない状況から、所属組織の中でとさっ子健診プロジェクトの優先順位が低いと感じたり、土佐市のニーズに合わせてプロジェクトメンバーを柔軟に追加するための所属組織との調整ができなかったりした経験から、プロジェクトに対して大学組織とメンバーの温度差があることを課題として感じていた。しかし、健診日に実施した健康調査に人手が足りず、メンバー以外の看護学部教員の協力のもと実施した際、参加教員からいい経験になったとの感想を聞き、プロジェクトに参加してもらうことで、メンバー以外の教員にもプロジェクト参加の効果が波及することを感じていた。

メンバーは、連携事業の進展を感じるとともに、プロジェクトのあり方はこれでよかったのかという疑問を感じていた。とさっ子健診の目的は明確だったが、プロジェクトの目的は果たして明確だったのか、もっとプロジェクトの目指すところを共有して活動すべきでなかったかと課題を感じているメンバーもいた。

さらに、連携の相手である土佐市との連携関係のあり方について、『土佐市と連携することが難しい。どこまでするべきか』と、課題に感じていた。また、これまでの話し合いの中で、健診の受け皿・フォロー的支援や事業との組み合わせ方についての検討や、土佐市連携事業における研究活動の位置付けの共通認識ができていないことなどについて、課題と感じていた。土佐市と実施している他の連携事業との連携については、情報共有はできているが、連携ができていないと捉えていた。

表2：とさっ子健診プロジェクトの成果と課題 ●：ワークショップで挙げた意見（抜粋）

	成 果	課 題
連携事業の推進に関する効果と課題	<p>○連携事業が進んでいる</p> <ul style="list-style-type: none">●地域の関係機関と大学の連携が強化された●大学の地域連携として実際に動いているプロジェクトのよい例になっている●大学が情報提供を行った先進地の取り組みが大いに参考になった <p>○プロジェクトメンバーや土佐市スタッフとの連携がとれた</p> <ul style="list-style-type: none">●学部間の連携ができた●プロジェクトメンバーのチームワークができた●大学内メンバーが役割分担してプロジェクトを進められた●忙しい中メンバー間や土佐市職員との間で時間を調整し、皆が集まり直接顔を合わせて話し合うことができていた●土佐市スタッフの熱い思いを聞き、また課題に対し意欲的に取り組む姿を見て、こういう地域のスタッフと一緒に活動できることに喜びを感じた <p>○メンバー以外の大学教職員にもプロジェクト参加による成果があった</p> <ul style="list-style-type: none">●メンバー以外の参加教員にもプロジェクト参加がよい経験になっていた	<p>○大学組織とプロジェクトメンバーの温度差がある</p> <ul style="list-style-type: none">●他の仕事を優先せざるを得ない状況がある●所属組織の中でとさっ子健診プロジェクトの優先順位が低いと感じる●相手のニーズに合わせて大学メンバーを柔軟に追加するための所属組織との調整ができなかった <p>○時間と調整の大変さ</p> <ul style="list-style-type: none">●大学行事や他の仕事との調整の難しさ <p>○プロジェクトのあり方</p> <ul style="list-style-type: none">●とさっ子健診の目的は明確だったが、プロジェクトの目的は果たして明確だったのか、もっとプロジェクトの目指すところを共有して活動すべきだった <p>○連携のあり方</p> <ul style="list-style-type: none">●大学と行政では、立場の違いや考え方の違いがある。連携でどこまですべきかが難しい●健診の受け皿・フォロー的支援や事業との組み合わせ方についての検討が必要だったのでは●土佐市連携事業における研究活動の位置付けの共通認識ができていない●土佐市と実施している他の連携事業と情報共有はできているが、連携はできていない
連携相手への貢献に関する効果と課題	<p>○土佐市のサービス整備につながった</p> <ul style="list-style-type: none">●とさっ子健診が事業としてスタートできた●学校の健診を受けていない不登校の児童生徒に対しても、健診を受ける機会を提供することになる <p>○健診に参加した住民が健診の機会を喜んでくれた</p> <ul style="list-style-type: none">●感謝の言葉をもらった時に嬉しかった <p>○土佐市住民の役に立てていると実感した</p> <ul style="list-style-type: none">●この健診が、保護者が保健師などと情報交換できる良い機会になっていると感じた●地域の中で健診の機会があることで、ざっくばらんに子ども同士親同士がお互いの健康チェックのことを話せているのが良い <p>○土佐市スタッフに感謝された</p> <ul style="list-style-type: none">●大学の関わりにより科学的な分析ができ、土佐市にとっても後盾的存在になり、喜んでもらえた●大学との連携によって、参加親子の意識や行動の実態をより深く捉えられ、健診データ分析の視点が豊かになった	<p>○調査の分析と活用</p> <ul style="list-style-type: none">●解析方法を事前に詰めておくべきだった●健診結果と質問調査との関連をどう関連付けて示すかが課題●結果の公表をどのようにしていくかが課題●今後、健診の実施が健康につながっているという成果を実証していかなければならない
大学に得られた成果と課題	<p>○プロジェクトメンバーそれぞれに学びがあった</p> <ul style="list-style-type: none">●地域の学童期の子どもと親の健康に関する意識への理解が深まった●子どもが関心を持つことで親が変化するという親への意識づけの方法を知ることができた●地域課題の把握ができた●行政組織と連携する経験が初めてで勉強になった●活動の途中で専門領域に関連した知識の不足を感じ、自分の課題が見いだせた。これが自分の成長につながっていくと思う●土佐市の職員や他学部教員と連携しながら、それぞれの分野から意見が出され、視野を広めることができた <p>○研究活動につながった</p> <ul style="list-style-type: none">●分析の一部を学会で報告できた●土佐市スタッフが大学と一緒に研究的に関われた <p>○学生の教育活動につながった</p> <ul style="list-style-type: none">●学生と教職員と一緒にプロジェクトに取り組めた●健診への参加が専門職としてのコミュニケーションを勉強する機会になった●学生の視野を広げることができた●プロジェクトへの参加が卒業論文の題材につながった	<p>○研究活動の課題</p> <ul style="list-style-type: none">●プロジェクトメンバーとなった学内教員の元々の研究テーマとプロジェクトでの活動内容が一致していなかった <p>○学生の教育活動の課題</p> <ul style="list-style-type: none">●学生がより住民や土佐市スタッフと関わる機会を作れるよう、学生の参加方法を工夫する必要がある
成果の波及に 関する効果と課題	<p>○子どもの健康に注目が集まった</p> <ul style="list-style-type: none">●結果のインパクトが強く、子どもの健康に注目が集まった <p>○県内の他の市町村に影響を与えられた</p> <ul style="list-style-type: none">●他市の議会でも話題になる等、とさっ子健診が県内の他の市町村にインパクトを与えられた	<p>○県の取り組みになっていくよう、県内全体の意識を高めていく</p> <ul style="list-style-type: none">●一県民として、土佐市だけでなく、県内の取り組みになっていくよう、意識が高まるといい

2. 連携相手への貢献に関する効果と課題

連携相手である土佐市への貢献は、とさっ子健診が予定どおり順調に開始されたことと関係していた。メンバーは、とさっ子健診が事業としてスタートできたという具体的な成果があることを評価していた。さらにメンバーは、健診に参加した住民が健診の機会を喜んでくれたことや、土佐市住民の立場に立って『この健診が、保護者が保健師など身近な人と情報交換できる、よい機会になっていると感じた』ことなどから、土佐市住民の役に立てているという実感を得ていた。また、『学校の健診を受けていない不登校の児童生徒に対しても、健診を受ける提供することになる。』と、とさっ子健診の開始による市民へのサービス整備を成果として捉えていた。そして、『土佐市の役に立っているという気持ちがモチベーションになった。感謝の言葉をもらった時に嬉しかった』『大学の関わりにより科学的な分析ができ、土佐市にとっても後盾的存在になり、喜んでもらえた』と、土佐市スタッフに感謝されていることを成果として捉えていた。

大学との連携によって、参加親子の意識や行動の実態をより深く捉えられ、健診データ分析の視点が豊かになったと捉える一方で、調査の分析と活用が今後の課題として多くのメンバーから挙げられた。具体的に、健診データと問診項目や調査内容との関連の示し方、健診成果の実証、調査結果のフィードバックと活用が挙げられた。

3. 大学に得られた成果と課題

大学に得られた成果と課題は、プロジェクトメンバーの学び、研究活動、教育活動の3側面から挙げられた。

住民と触れ合い、行政組織と連携する経験が、プロジェクトメンバーそれぞれの学びになっていた。学びの内容は、学童期の子どもや家族の生活実態や意識に関する理解、学童期の子どもや親に働きかける方法の理解、行政組織との仕事の進め方、地域課題への理解、他領域の教員や地域の専

門職者との協働方法であった。専門的知識や地域の現状理解だけでなく、『活動の途中でまだまだ自分の専門領域に関連した知識が足りないことを感じ、自分の課題が見いだせた。これが自分の成長につながっていくと思う』や『土佐市の職員や他学部教員と連携しながら、それぞれの分野から意見が出され、視野を広めることができた』など、教員の自己成長につながるという効果が確認された。

研究活動に関する成果は、分析の一部を学会で報告できたことと、土佐市スタッフが大学と一緒に研究的に関われたことが成果として挙げられた。その一方で、プロジェクトメンバーとなった学内教員の元々の研究テーマとプロジェクトでの活動内容が一致していなかったことが、今後の研究活動の推進における課題として挙げられた。

学生の教育活動に関する成果は、学生と教職員と一緒にプロジェクトに取り組めたこと、健診への参加が専門職としてのコミュニケーションを勉強する機会になったこと、視野を広げることができたこと、卒業論文の題材につながったことが挙げられた。これと同時に、学生がより住民や土佐市スタッフと関わる機会を作れるよう、学生の参加方法を工夫することが課題として挙げられた。

4. 成果の波及に関する効果と課題

成果の波及では、子どもの健康に注目が集まったこと、また、他市の議会で話題になる等、とさっ子健診が県内の他の市町村に影響を与えられたことが成果として挙げられた。この流れをさらに広める必要性から、土佐市だけでなく、県内全域の取り組みになっていくよう、県内全体の意識を高めていくことが今後の課題として挙げられた。

VI. 考察

1. 大学と自治体の連携事業における成果と課題

土佐市連携事業とさっ子健診プロジェクトに参

加した教職員は、連携事業がもたらした成果を、連携相手にもたらされた効果、大学にもたらされた効果、そして、高知県内に波及した効果として捉えていた。

本学と土佐市の包括連携協定は、相互連携による地域の活性化と振興および地域住民の健康と福祉の増進への寄与を目指している。メンバーは、市のサービスの充実や事業参加者の満足度の視点から、このプロジェクトの目的に沿った成果がもたらされていると捉えていた。そして、この影響が県内に広がっていることと合わせて、さらに波及効果を高めていくことを今後の課題として認識していた。これは、メンバーが、一自治体との連携活動の成果を県内に波及させていくことが県立大学の使命であると捉えていたことを表している。このように、メンバーが大学の使命を共通理解して地域貢献活動を実施することで、成果を幅広く捉える視点を持つことができるようになると思う。

大学の成果として、本プロジェクトでは、参加した教職員それぞれの能力向上と、研究教育活動の充実という大学全体に通じる成果があった。地域医療機関との連携が大学教員のファカルティ・ディベロプメントに役立つとの報告¹⁾はあるが、これと同様に、地方自治体との連携も、大学教員の資質向上に効果があるものとする。本プロジェクトでは、学部横断的に、また、教員と事務職員が長期的にチームとして活動するからこそ得られた特徴的な学びが含まれていた。また、本プロジェクトでは、メンバーでない教員がプロジェクトに参加したことで、成果が大学内に波及していた。学内に開かれたプロジェクトとして実施していくことにより、ファカルティ・ディベロプメントの効果がより高まると考える。研究教育活動の充実という成果に関しては、大学の教育・研究機能を地域に役立てながら、活動を通じて大学の教育・研究機関としての機能向上につながっていた。これは、本プロジェクトが単なる地域貢献ではなく連携事業だったからこそ、より互いの利益を重視

して活動していたことが成果として表れたと考える。

プロジェクトの課題として挙げられていた内容のうち、大学組織とプロジェクトメンバーの温度差や時間と調整の大変さなどは、大学内におけるプロジェクト推進を支援する組織体制づくりの必要性を示していた。プロジェクトのあり方や連携のあり方に関する課題は、官学連携において、互いの立場の違いや組織目的の違いからくる共有の困難さがあることを示していた。そして、調査の分析と活用、研究活動、学生の教育活動に関する課題は、大学固有の研究教育機能のさらなる発揮が求められていることを示していた。これら組織的な支援体制の整備、目的の共有、大学のもつ研究教育機能の発揮の3つは、連携事業を発展させるための課題というよりも、むしろ、連携事業の基盤となるものである。したがって、連携の基盤を強固にすることが、連携事業の成果につながると思われる。このためには、大学全体の活動の中で連携事業を通じた人材育成や地域貢献をどのように位置づけるか、大学の方針が重要だと考えた。

2. 連携事業の効果的な推進に向けて

とさつ子健診プロジェクトは、新規事業を企画・実施するという具体的な目標があったため、事業の開始と継続的な実施によって、明確に成果が確認できるという特徴がある。しかし、プロジェクトの最終的な目的は、土佐市の小中学生とその家族の健康生活支援である。健診が開始された現在、土佐市においては、開始した健診の効果検証と、健診を活用した総合的な健康管理支援体制づくりが次の目標となる。そして、健診の効果測定や、小中学生とその家族に対する効果的な健康生活支援方法を明らかにするために、大学の研究機能のさらなる発揮が求められている。

このように、連携事業の推進により、目標も変化する。次の目標を設定するためには、連携事業の目的の共有が重要である。また、連携を進めることで、どこまで連携すべきかという課題が挙がっ

てきたように、互いの連携のあり方に関する捉え方も変化するため、連携の目的についても、随時共有を図る必要があると考える。これに関連して、とさっ子健診プロジェクトでは、これまで合同勉強会は実施してこなかった。しかし、医療機関と大学の連携では、看護実践・教育・連携が有機的に関連し、効果的に機能することが期待⁵⁾されている。プロジェクトの一環として、大学と土佐市双方で行われる事例検討会や勉強会にそれぞれが参加するというような、教育・学習活動の連携など、新たな活動の可能性を模索することも重要だと考える。

3. 終わりに

今後も、とさっ子健診プロジェクトを通じて、大学と連携先である土佐市が互いに成果を得られ、さらにその影響が県内全体に波及するような活動の推進に努めていきたいと考える。

文献

- 1) 石川麻衣, 池添志乃: 健康管理の習慣づくりに関する児童と保護者の意識・行動—児童を対象としたとさっ子健診を通して—, 日本地域看護学会第16回学術集会, 2013.
- 2) 荒牧礼子, 石川麻衣, 首藤ひとみ, 水島直子, 池田光徳: 小学校児童における生活習慣の現状および健康管理の意識強化を目的とした習慣づくりに関する項目の検討, 日本未病システム学会第20回学術総会, 2013.
- 3) 山本尚, 荒牧礼子, 名村真梨菜, 山岡知美, 笹岡あゆみ, 石川麻衣, 首藤ひとみ, 池添志乃, 池田光徳: 健診に基づく児童の現状と生活習慣予防に繋がる指導項目の検討, 四国公衆衛生学会, 2014.
- 4) 亀岡智美, 竹尾恵子: 米国における看護実践・教育・研究のユニフィケーションに関する文献の外観, 国立看護大学校研究紀要, 2(1), 2-9, 2003.

- 5) 中村恵子: 大学と病院の人材育成連携・協力プロジェクト 札幌市立大学と民間病院の取り組み, ナーシング・トゥデイ, 23(7), 80-81, 2008.